

氏名(本籍)	みずの はる ひさ 水野 治久(千葉県)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博乙第1737号
学位授与年月日	平成13年4月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	アジア系留学生の被援助志向性と社会・心理的要因の関連 —効果的な援助方法の開発をめざして—
主査	筑波大学教授 教育学博士 田上 不二夫
副査	筑波大学教授 文学博士 山本 眞理子
副査	筑波大学助教授 Ph. D. 石隈 利紀
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 清水 一彦

論文の内容の要旨

本研究の目的は、留学生の適応に関する援助サービスを検討することである。具体的には、①アジア系留学生を取り巻くヘルパー（援助者）からの援助の効果、および留学生がヘルパーにどの程度援助を求めるかの被援助志向性について検討すること、②アジア系留学生を取り巻くヘルパーに対する被援助指向性と関連のある要因を抽出し、留学生の被援助指向性を考慮した援助サービスのあり方について検討することを目的とする。本研究は、留学生の援助に関する研究の動向（文献研究1、2）、留学生の援助に関する調査研究（調査研究1、2）、留学生の被援助志向性に関する研究（調査研究3、4）から構成されている。

・留学生の援助に関する研究の動向（文献研究1、2）

まず、留学生の援助に関する研究の動向を把握するために、留学生のソーシャル・サポートと適応に関する研究を展望し（文献研究1）、次に被援助志向性に関する研究の動向を展望した（文献研究2）。その結果、①留学生の援助の効果把握するためには、留学生を取り巻く様々なヘルパーからのソーシャル・サポートと適応領域の関連を明らかにする必要があること、②留学生の被援助志向性の実態を把握する必要があることが明らかになった。

・留学生の援助に関する調査研究（調査研究1、2）

調査研究1で、様々なヘルパーからのソーシャル・サポートが適応に及ぼす影響を明らかにするために、中国、台湾、韓国からのアジア系留学生264名を対象に質問紙調査を実施した。この調査では、留学生を取り巻く、専門的ヘルパー（保健管理センター医師・カウンセラー、留学生担当教官）、役割的ヘルパー（日本語教師、指導教官、留学生事務担当者）、ボランティアヘルパー（同国人留学生、日本人学生）からの、学習・研究、心身健康、対人関係、住居・経済領域におけるソーシャル・サポートとその領域の適応との関連を調べた。専門的ヘルパーと役割的ヘルパーからのソーシャル・サポートと適応の関連が認められた領域は、勉強や生活の現実的な問題解決が必要な領域であった。また、関連のなかった領域は対人関係や心身健康のどちらかと言えば内面的な問題を含む領域であった。この背景には、留学生が内面的な問題で援助を求めたがらない可能性があることが考えられた。

調査研究2では、中国、台湾、韓国からのアジア系留学生239名、日本人学生135名を対象に質問紙調査を実施し、留学生の被援助志向性と適応の関係を検討した。その結果、①留学生は日本人学生より自分で問題を解決する傾向が強いこと、②被援助志向性と適応の関連は、心身健康領域を除く全ての適応領域で何れかのヘルパーに対する被援助志向性との関連が認められ、留学生の被援助志向性の適応を高めることで留学生を援助できる可能性が示唆された。

・留学生の被援助志向性に関する研究（調査研究3、4）

調査研究3では、専門的ヘルパーである留学生担当教官に対する被援助志向性に焦点をあてた。この調査では、264名の中国、台湾、韓国のアジア系留学生を対象に質問紙調査が実施された。その結果、被援助志向性にはソーシャル・サポートと「呼応性への心配」との関連が認められた。つまり、被援助志向性はソーシャル・サポートを多く受けていると高く、呼応性の心配が高いと低くなることが示された。

調査研究4では、「留学生担当教官」（専門的ヘルパー）、「日本語教師」、「指導教官」（役割的ヘルパー）、「同国人留学生」、「日本人学生」（ボランティアヘルパー）の5種類のヘルパーに対する被援助志向性を検討した。257名の中国、台湾、韓国のアジア系留学生を対象に質問紙調査を実施し、被援助志向性には呼応性への心配とソーシャル・サポートが関連していた。また、一部のヘルパー・領域には、性差、日本語能力、自尊感情が関連していることが明らかになった。自尊感情と被援助志向性の関連は、指導教官・同国人留学生の一部の領域で正の関連を示し、「傷つきやすさ仮説」が支持された。

・本研究の理論的貢献、実践的貢献

本研究の理論的貢献として、①被援助志向性に関連する変数として、ソーシャル・サポートと呼応性への心配の二つの変数を抽出したこと、②性差や日本語能力、自尊感情などの変数は、領域やヘルパーによってその関連の仕方が異なること、③自尊感情と被援助志向性の関連は、傷つきやすさ仮説が支持されたことが挙げられる。

本研究の実践的貢献は、呼応性への心配に配慮しながら、積極性に援助を供給することで、留学生の被援助志向性を高められる可能性が示されたことである。呼応性への心配に対する配慮の例として、留学生を取り巻く援助資源について情報提供を行うこと、援助の効果を留学生自信に認識してもらうような援助を供給することが考えられる。しかしながら、ソーシャル・サポートと被援助志向性の関連は循環的である。そのため、留学生が相談しやすいヘルパーに相談できる体制を整えること、被援助志向性が低くても援助を受けられる方法を開発することを議論した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

児童、生徒、学生を対象としてカウンセリング、あるいは一般的にカウンセリングに関する研究は、カウンセラーなど援助者の視点からの研究が大部分をしめる。つまり援助者が援助対象（クライアント）の人格や行動における問題をどうとらえるかを基盤として、カウンセリングの方法を工夫しその妥当性を論じるのである。しかし、本論文は被援助志向性という概念に焦点を当て、カウンセリングを受ける者（ここでは留学生）の視点からカウンセリングのあり方を検討したところに、カウンセリングの研究における意義が認められる。本論文は、日本における留学生の被援助志向性についてのほとんど初めての研究と言える。とくに留学生の被援助志向性と呼応性への心配との関連は、今後の留学生への援助サービスのあり方に影響を与えると思われる。さらに従来援助サービスの研究はカウンセラーなどの専門家によるカウンセリングに焦点を当てることが多いが、本論文では教師や友人などコミュニティの様々な援助資源に対する被援助志向性を検討し、大学コミュニティとしての留学生援助サービスのあり方に示唆を与えたところも意義が大きい。

以上のように本論文は、カウンセリング心理学の領域におけるいくつかの新知見を得たものと認めることができるが、一部に調査結果の分析に精緻さに欠ける部分があることや研究成果の実践上の妥当性についての検討の不足が指摘できる。本論文はこのような今後さらに追求されるべき課題を残してはいるものの、アジア系留学生の留学生担当教官（専門的ヘルパー）、日本語教師・指導教官（役割的ヘルパー）、同国人留学生・日本人学生（ボランティアヘルパー）に対する被援助志向性と関連する要因（呼応性への心配など）を明らかにし、留学生への援助サービスのあり方の示唆を得るという所期の目的は十分に達成していると言える。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。